

## 文化政策による地域の人的資源の形成の過程

—新潟県十日町地域「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を事例に考察する—

唐 沢 民

### 1. はじめに

新潟県十日町市と津南町の一帯は十日町地域と呼ばれる広域文化圏である。豪雪地帯や米作農業、温泉地といった独特の自然環境や文化が美しい里山の風景を創り上げ、今もその風景が形を留める場所である。

その十日町地域で、2006年7月23日から9月10日の間、第3回「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006（以下大地の芸術祭）」が開催された。「大地の芸術祭」は、3年に一度開催されるアートプロジェクトである。総面積760 km<sup>2</sup>の新潟県十日町市と津南町（図1<sup>2</sup>）をまるごと屋外の美術館に見立てるこの展覧会

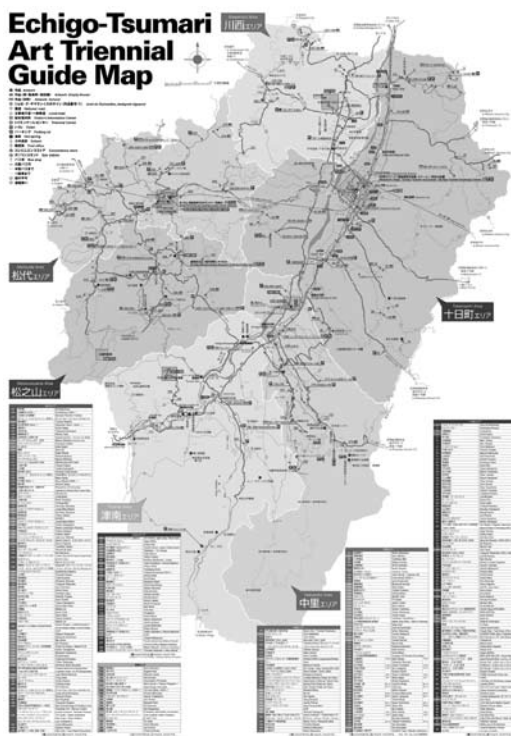


図1 大地の芸術祭2006公式マップ

<sup>1</sup> 1994年当時十日町地域は十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町の1市4町1村であった。2005年に市町村合併を行い、現在十日町市と津南町の1市1町となっている。

<sup>2</sup> 大地の芸術祭2006公式ホームページより引用。

<http://www.echigo-tsumari.jp/access/index.html> (2007年5月6日確認)

には、毎回300点を超える現代アートの作品が展示される。

2003年9月5日から7日の3日間、筆者は、第2回「大地の芸術祭」に参加した。そこでの体験はそれまで自分が体験してきたアート鑑賞とは、質的にも量的にもまったく異なる体験であった。

量的に異なる体験は、展示会場の広さと作品数に起因している。6つの市町村をまたいだ合計760 km<sup>2</sup>という面積は、美術館や博物館といった建物型の展示会場とは比べることができないほど広い。また、会場のどこへ行っても目に入ってくる山や川や木々といった雄大な自然にも圧倒される。その広大な風景の中を、300を超える作品を訪ねて歩くのである。都市のように公共交通が発達しているわけではないので、1日や2日ですべての作品を見終えることはできない。しかし、その不便さがかえって体験に厚みを加えてくれたのである。

質的に異なる体験とは、自然や人間やそれらが織り成す物語が、いやおうなく作品鑑賞に影響を与えるということの意味している。もちろん、作品自体がその物語を纏っている場合も多い。美術館や博物館といった場では感じるができない、作品と作品が置かれている場所の関係性を見て感じるができるというのが、「大地の芸術祭」の醍醐味であった。

それらの体験を経て、アートは鑑賞するものという概念が崩れ去り、身体を使って体験する面白さを初めて知った。広い大地を走り回りながら、自然とアートと地域の人々と関わりながら、どんどん感覚が開放されていくのを感じた。そのほかにも、世界40の国と地域の作家の参加を得るという規模、世界にも例を見ない里山という環境における展示、地域と行政とアーティストの協働、ボランティア「こへび隊」の存在、震災や豪雪による被災からの復興等、このアートプロジェクトを語るファクターは枚挙にいとまがない。

本稿は、5つの章から構成される。第1章では、本稿の目的と研究の手法について明らかにする。第2章では、「大地の芸術祭」の根幹を形成している新潟県や市町村の文化政策の背景と、政策の理念についてまとめる。第3章では、

筆者の体験を交えて、第1回から第3回までの「大地の芸術祭」における地域の人々の関わりについてまとめ、その変化の過程をみる。第4章では、第3章においてみた「大地の芸術祭」と地域の人々の関わりを、文化政策による地域の人的資源の形成という視点から考察する。第5章では、これからの「大地の芸術祭」に向けた、課題と展望について述べる。

## 2. 本稿の目的と手法

### 2.1 本稿の目的

本稿は、第1回が開催された2000年から、2006年開催の第3回までの6年間に、「大地の芸術祭」が地域にもたらした変化に着目する。その変化とはどのようなものであったのか、筆者の体験を交えてひも解きたいというのが本稿の目的である。

事例として扱うのは、2000年から2006年までの6年間に、計3回開催された「大地の芸術祭」である。「大地の芸術祭」の正式名称は、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」で、その名の通り3年に一度開催される。「大地の芸術祭」は単に美術を発表したり、また鑑賞したりするためだけにあるのではない。新潟県の地域活性化政策である「ニューにいがた里創プラン（以下里創プラン）」（本稿3.1に詳述）を受けて十日町地域が策定した、「越後妻有アートネットワーク整備事業（以下アートネットワーク事業）」（本稿3.2に詳述）のうちの一つである。

「市民社会」と「文化行政」が、文化政策の新たな潮流の一つに置かれ<sup>3</sup>、地域の活性が自治体文化政策の戦略に位置づけられる<sup>4</sup>。昨今、「里創プラン」と「アートネットワーク事業」という2つの地域活性化事業から生れ出た「大地の芸術祭」は、新潟県と十日町地域の文化政策であるといえる。本稿では、新潟県と十日町地域の文化政策という枠組みの中で行なわれた「大地の芸術祭」を、地域住民の参加の変化という視点から追う。この視点は、「ある文化政策」が展開された地域にもたらした効果を考察するものとなるであろう。ただし本稿は、「ある文化

<sup>3</sup> 上野征洋編著『文化政策を学ぶ人のために』世界思想社、2002年、16ページ

<sup>4</sup> 中川幾郎『分権時代の自治体文化政策』勁草書房、2001年、39ページ

政策」ならどの施策にも当てはまる考察を述べるのではなく、「大地の芸術祭」という限定された時期と場所における限定された人々<sup>5</sup>の事例であるという事を前提としたうえで考察である。

## 2.2 研究の手法

本稿では、「大地の芸術祭」という事例を、背景となる政策と、地域住民の参加の変化という2つの軸から追う。その上で、文化政策を通じた地域の人的資源の形成という視点から考察をしたい。人的資源とは、地域の特定の課題解決に向けて、住民自らが積極的に行動する状態<sup>6</sup>を指す。

「大地の芸術祭」での体験を通じて感じた地域の変化が、新潟県と十日町地域の文化政策から生れ出した施策であるという事を鑑み、文化政策によって地域の人的資源が形成されたと言い換える事が出来るのではないかというのが筆者のリサーチクエストである。本稿ではそのリサーチクエストを携え、第1回から第3回までの「大地の芸術祭」を、文化政策による地域の人的資源の形成という視点から論じたい。

## 3. 背景となる政策

本章では、「大地の芸術祭」という事業の持つ、背景となる2つの政策と、その理念をまとめる。1994年、新潟県が「里創プラン」を策定した。「里創プラン」によって広域市町村指定を受けた十日町地域圏内の6つの市町村が1996年に策定したのが、「アートネックレス事業」である。「アートネックレス事業」では、9つの事業が掲げられ、その中の最も特徴的な事業が、「大地の芸術祭」であった。この「里創プラン」と「アートネックレス事業」という2つの政策の内容に

ついて順番に見ていくことにしよう。

### 3.1 「里創プラン」

「里創プラン」は、1994年に新潟県が広域連携と地域活性を目指して、独自に策定した政策である。理念には、「広域市町村圏を基本的な単位として、構成市町村が一体となって個性的なプロジェクトを展開することにより、広域連携と地域活性化の起爆剤を目指す」<sup>7</sup>とあり、生活文化圏を一つの単位とした、広域的な地域活性を目指していることが明らかにされている。

1994年当時、14圏域あった県内の広域市町村圏のうち、過疎化・高齢化が進んだ圏域で、高速交通体系や大規模事業の整備が見込まれている6つの圏域を、県が「里創プラン」の対象に指定した。指定された圏域は、「県と市町村が協力して策定するもの」とされた「里創プラン」の策定を、それぞれ独自にまとめ、事業化した。「里創プラン」に指定された地域は、3年間の準備期間を経た後、10年間の事業の実施を行うことができた。ひとつの政策を13年間継続するという長期的視野に立った政策であった。

そのような「里創プラン」に選ばれた6圏域のうちのひとつが、本稿の舞台となる十日町地域であった。具体的なプラン策定に向けて、1995年、十日町地域の各市町村の行政担当者らが集まってワーキングチームが生まれた<sup>8</sup>。このワーキングチームによる定期的な会議や、有識者との懇談、先進事例地への調査などを重ねて、1996年にまとまったのが、「アートネックレス事業」である。

### 3.2 「アートネックレス事業」

ここで、「アートネックレス事業」が、十日町地域のプランとして策定されるに至った経緯を簡単に記したい。「里創プラン」策定後、十日町地域のワーキングチームは具体的な事業内

<sup>5</sup> 杉万俊夫編著『コミュニティのグループ・ダイナミックス』京都大学学術出版会、2006年、34ページ

<sup>6</sup> 今川見、山口道昭、新川達郎編著『地域力を高めるこれからの協働ファシリテータ育成テキスト』第一法規、2005年、143ページ

<sup>7</sup> 新潟県ホームページ内「十日町地域ニューにいがた里創プラン推進事業補助金（償還費分）交付要綱」より抜粋（2007年5月6日確認）

<sup>8</sup> メンバーは、北川フラム（総合コーディネーター）を筆頭に、新潟県職員、広域圏事務局員と、十日町地域の市町村行政担当者からの代表らで構成された。

容を模索していた。地域活性化事業の柱が登場するに至るまで、侃々諤々の議論がおこなわれた。そんな中、ワーキングチームが、十日町地域出身のアートディレクターである北川フラム氏と出会い、出来上がったのが、「アートネットワークス事業」である。

十日町地域が採択した、「アートネットワークス事業」は、1996年から2006年までの10年間にわたって、「人間は自然に内包される」という理念のもと、9つの事業を展開した（表1<sup>9</sup>）。事業は、9つのうち6つの事業が道路改良や架橋といった土木事業で、残り3つの事業（表1網かけ部分）が地域への誇りと愛着の醸成や地域の魅力増進などを目的にしたソフト事業である。予算規模約40億円の公共事業である「ア

ートネットワークス事業」だが、十日町地域の負担分2億8千9百万円（全体の約14%）は全てこのソフト重視型の3つの事業に充てられている。

これらの事業全体を貫く大きな特徴として掲げられているのが、「アートの活用」である。その中でも、「アートの活用」を体現しつつ、事業理念を反映させている事業が、「大地の芸術祭」である。この「大地の芸術祭」は、中山間地域が抱える諸問題の解決策としての側面を担ってきた公共事業が、土木建築を中心としたハード型から、人材を育成していこうというソフト重視型にシフトした事例だといえる。

次章では、そのソフト重視型という新しい公共事業が、地域にどのような効用をもたらしたのかについて、第1回から第3回までの「大地

事業名	事業主体	地域戦略プラン 事業費（百万円）	事業の概要
越後妻有大地の芸術祭事業	十日町地域広域事務組合	261	作品展示、ワークショップ、シンポジウム 他
花の道事業	十日町地域広域事務組合	20	マスタープラン策定、ワークショップ、講習会
越後妻有8万人のステキ発見事業	十日町地域広域事務組合	8	ワークショップ、小中学生の写真騒動
道路改築市道高山太子堂線	十日町市	130	橋梁4基、道路改良舗装・歩道舗装
特一（一）252号 川西町上野拡幅	新潟県	559	道路改良
道路改築（一）117号 津南町大倉バイパス	新潟県	640	道路改良・大倉トンネル
道路改築（一）353号 中里村葎沢拡幅	新潟県	600	道路改良・スノーシェッド
道路改築（一）253号 松代道路	新潟県	1000	橋
道路改築（一）353号 松之山バイパス	新潟県	731	トンネル、橋
地域戦略プラン全体事業費		3949	

表1 越後妻有アートネットワークス整備事業概要

<sup>9</sup> 市報とおかまち『だんだん』平成18年7月25日32号、2ページ

<sup>10</sup> 越後妻有アートネットワークス整備事業説明サイトより抜粋。<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/chiikiplan/niigata13.html>（2007年5月6日確認）

の芸術祭」を追いながら明らかにする。その際、本稿 2. 2 で述べた筆者のリサーチクエスチョンを携え、「大地の芸術祭」と地域の人々との関わりの変化に焦点を絞ることとする。

#### 4. 地域住民の参加

本章では、第1回から第3回までの「大地の芸術祭」における、地域住民の参加の変化をたどる。第1回から第3回の開催までの10年間に於ける住民の参加の変化は、「大地の芸術祭」という文化政策がもたらした地域の人的資源と考えられるのではないかと筆者は捉えている。

また本章では、フィールドワークとして参加した第2回と第3回の「大地の芸術祭」における体験や、会話や、インタビューを記録し、資料として使用した。第4章 4. 2 と 4. 3 では、筆者の体験や会話、インタビューを記録した資料を交えて検証する。

##### 4.1 第1回 批判と無視

2000年7月20日から9月10日、第1回「大地の芸術祭」が開祭された。「第1回はとにかくやるだけ<sup>11)</sup>」。「大地の芸術祭」総合ディレクターとなった北川フラム氏は、後に第1回「大地の芸術祭」を振り返ってこのように述べている。その言葉通り、第1回「大地の芸術祭」は、地域住民の十分な協力と理解を得たものではなかった。

「大地の芸術祭」自体は、16万人の観光客を動員し全国に名前を知られることとなったし、現代アートの新たな展開として、また中山間地域の活性化事業として注目を集めた。その外からの評価が、地域のソフトを重視するという理念を持つ事業としては決して成功したとは言えない第1回「大地の芸術祭」が、第2回、第3回と事業を継続し、進化させるに至った後ろ盾になったと言えるかもしれない。

しかしながら、2000年当初、地域住民や議会からは、「そのお金を何で福祉や道路に使わな

いか<sup>12)</sup>という意見が出され、最後まで「大地の芸術祭」に対する住民の違和感を拭う事は出来ないまま開催を迎える事となった。違和感は準備期間から表面化し始めており、作品設置場所の確保が難航するという、里山を舞台にした屋外展示型の「大地の芸術祭」において最も重要な部分が課題となっていた。ワーキングチームの呼びかけに対し、十日町地域内の200以上ある集落の中で、作家の受け入れを表明したのはたったの2集落だけであったのだ。そのような状況から、第1回の作品設置場所は、公園などの公共の場所が中心となった。行政担当者は、市の情報誌で、第1回「大地の芸術祭」においては地域住民の参加や関わりはあまりなかった、と振り返っている。このような状況から、第1回「大地の芸術祭」事業は、地域の住民からは批判を浴びせられ、その他の大多数の人々からは無視されていたという事実が浮かび上がる。

しかしながら一方で特筆すべきは、「大地の芸術祭」に参加した作家と地域住民の協働がわずかながらもなされていた点である。地域からは冷遇された第1回の「大地の芸術祭」において、住民たちに受け入れられないながらも、参加作家らは土地への深い考察をし、地域の特徴を捉えた力のある作品を残していった。作家の想いに答えて、交流や協働作業が生まれた作品<sup>13)</sup>もある。それらの作品や協働が、第2回「大地の芸術祭」における地域住民の参加に変化をもたらしたと筆者は考える。

次節では、批判と無視という形をとった地域住民の「大地の芸術祭」への見方が、第2回「大地の芸術祭」において、どのように変化し発展したのかを見てみよう。

##### 4.2 第2回 楽しむ主体の形成とホスピタリティ

2000年から3年後の、2003年7月20日、第2回「大地の芸術祭」が始まった。筆者はこの第2回「大地の芸術祭」に2泊3日の行程で参加している。そこで筆者は、出会いを楽しみ、ホ

<sup>11)</sup> 市報とおかまち『だんだん』前掲号、6ページ

<sup>12)</sup> 市報とおかまち『だんだん』前掲号、4ページ

<sup>13)</sup> 作家マリーナ・アブラモビッチによる「夢の家」や、作家ジェームズ・タレルによる「光の家」など。

スピタリティをもった地域住民らに出会った。第1回が批判と無視に晒された「大地の芸術祭」であったことを考えると、第1回と第2回の間には明らかな変化があると考えられる。その変化を、筆者自身の体験からひも解いてみたい。

筆者の住む京都から、新潟県十日町市までは高速道路を利用して約8時間、特急電車では4時間半の距離である。2006年9月5日、筆者と友人は電車を利用し普通電車と快速電車を乗り継いで、約10時間かけてほくほく線十日町駅に到着した。目的は、「大地の芸術祭」に参加する事であった。広大な展示会場を廻るには車が必要であることはわかっていたが、車のない筆者らは現地の交通手段をヒッチハイクで獲得するという暴挙に出た。無計画とも呼べるこの行動がしかし、いくつかの出会いをもたらしてくれたのである。

1つ目の出会いは、十日町市へ向かう電車の中であった。宿も取らず日本円も持たないで、「大地の芸術祭」に来たというフランスからの旅人に筆者らは出会った。彼の代わりに宿を予約し、宿まで送っていった次の日、また彼と出会った。そのとき彼は、十日町市役所勤務の小林充さんと一緒に車で作品を見て回る途中だった。ここに、2つ目の出会いが生まれた。小林さんの好意によって筆者らも車に同乗し、一緒に作品を見て廻ることになったのだ。広いエリアを効率よく、また詳細な解説付きで案内していただき、筆者らはガイドブックには載っていない話やお店を知るに至り、「大地の芸術祭」を堪能することができた。

3つ目の出会いは、2日目のヒッチハイクで生まれた。地域の方が会期の最後の鑑賞にと、仕事を休んで作品を見て廻るのに同乗させてもらったのだ。筆者らは車中で、お互いに芸術の話、地域の方の仕事である伝統産業の蒔絵の話などをした。長年伝統工芸に従事してこられた地域の方が、仕事を休んで「大地の芸術祭」を楽しんでいる姿や、見ず知らずの筆者らを車に乗せることを快諾してくれたことが印象的であった。

最後の出会いは2日目の最後に会場で生まれた。偶然言葉を交わした地域の方が、筆者らの宿を聞くと駅まで少し遠いことを知って次の朝宿に迎えに来てくれたのだ。そして宿から少

し離れた十日町市の駅まで車で送ってくださった。重い荷物を抱えていたので大変ありがたかったことを覚えている。

2泊3日という短い滞在期間のなかで筆者らが出会ったいくつかの出会いは、作品鑑賞だけでは得られない感動を与えてくれた。例えば、すべての出会いに共通している、見ず知らずの筆者らに手を貸してくれた地域の方々のボランティアな姿勢への感動があった。また、知らないもの同士が、ひとつの作品を通して互いの感想を伝えあい意見を交わすことのできる感動もあった。さらには、「遠いところからよく来てくれたねえ」など、地域の方との会話の随所に、遠方から足を運んだ筆者らへの歓迎と労いの言葉が滲んでいたことに、深い感謝と感動を覚えた。

それらのことを鑑みるに、第2回「大地の芸術祭」で筆者らが体験した多くの感動を支えてくれたのは、地域の方々のホスピタリティであったと筆者は考える。第1回「大地の芸術祭」を、批判と無視で遇した地域が、第2回には、自ら楽しみ、訪れた人々を迎えるというホスピタリティを醸成していた事が伺える。

#### 4.3 第3回 作品制作への関与と作品の利用

第3回「大地の芸術祭」は、2006年7月23日から9月10日までの50日間開催され、延べ参加者数は30万人を超えた。第3回「大地の芸術祭」は、第1回から6年の歳月を経て、第2回より更に地域住民に浸透し支えられた事業となっている。その理由として、多くの作品において地域住民の参加を得ることができた事と、十日町地域にある空き家を利用した作品が生まれた事が挙げられる。そこには、地域住民の参加における、作品への関与と作品の利用という2つの変化が見て取れる。それらを順にみてみよう。

第3回「大地の芸術祭」では、多くの作家が、住民の参加による作品制作という手法を取り入れた。第3回「大地の芸術祭」で最も人気が高く集客力があつた作品（写真1<sup>14</sup>）、「こころの花—あゝの頃へ」（菊池歩）では、展示に使う青色のビーズで作る小さな花3万本を、作家と展示地域の住民と一緒に制作した。「空・木・土」

<sup>14</sup> 2006年8月29日筆者撮影



写真1 「こころの花—あの頃へ」

というコンセプトを打ち出した作家菊池の想いに共感した地域住民らが、2年以上の歳月をかけてこの作品に携わった。作品作りだけでなく、作家が地域の行事や踊りに参加<sup>15</sup>するなど、作家と地域の関係は濃密である事が伺える。

他にも、「パッセージ」（足高寛美）では、県立川西高等学校の学生が協働制作者として作品を作成しているし、地域のお母さんたちが作家と一緒に刺繍をする「ミラノ—東京：往復便」（アニラ・ルビク）なども地域住民の作品への関与といえる。

作品に関与するという行為からさらに発展して、地域住民が作品を利用するに至ったのが、第3回「大地の芸術祭」メインプロジェクト<sup>16</sup>の一つ、「空家プロジェクト」である。この「空家プロジェクト」は、2004年10月23日に最大震度7の新潟県中越地震で被災したことが、それまでの高齢化や少子化、都市化に加えて最後の引き金となり、加速が始まった空き家問題と、空き家をとりにまく地域の課題に向き合っている。

空き家問題は、空き家となった家が朽ちて危険な場所となるだけでなく、空き家の増加はコ

ミュニティの崩壊につながり、伝統的な風習の伝承をも阻害することになるという複合的な負の側面を持っている。一方で、通常農山村という、人的つながりが濃密な地域においては、空き家を、知らない他人に貸したり使わせたりすることは容易ではない。貸した相手の所業によっては、貸した側が、地域での信用を失うかもしれないからだ。

それゆえに、第3回「大地の芸術祭」で「空家プロジェクト」がメイン事業として取り組まれていることは、地域の人々に「大地の芸術祭」が信用される事業として浸透したことを意味する。そして、「アートの活力が空家をよみがえらせる」と、「大地の芸術祭」公式ガイドブック<sup>17</sup>に書かれている通り、「空家プロジェクト」は、廃屋の持つ独特の魅力と、そこに現代アートが加わることによって生まれた物語が、空き家をよみがえらせ、多くの鑑賞者を惹きつけたのだった。

この「空家プロジェクト」では、作品を利用して地元の女性たちが働くという試みもなされた。筆者も「空家プロジェクト」の作品のひとつ、「うぶすなの家<sup>18</sup>」（十日町地域）を訪問し

<sup>15</sup> 市報とおかまち『だんだん』2006年7月10日31号、7ページ

<sup>16</sup> 「空家プロジェクト」のほかに、「いけばな」、「やきもの」がメインテーマであった。

<sup>17</sup> 『美術手帖7月号増刊大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006ガイドブック』株式会社美術出版社、2006年、58号（884）

<sup>18</sup> 設計は、安藤邦廣と里山研究所による。参加アーティストは9人の陶芸家、澤清嗣、原憲司、中村卓也、吉川水城、吉田明、川上清美、黒田泰蔵、鈴木五郎、福田光加である。

た。設計を担当した安藤は、この「うぶすなの家」について、「大地の芸術祭」に訪れた人々をもてなす場<sup>19</sup>と述べている。その言葉の通り、「うぶすなの家」は、1階に里山料理の食堂が、2階には里山茶席があり、訪れた人々の憩いの場になっていた。筆者の訪問はちょうど昼時で、食堂は多くの観光客で賑わっていた。ふるまわれる食事は、地域の女性達が考えた特性のメニューで、オーダーや配膳と言った食堂の仕事も地域の女性達が行っていた。料理を配膳してくれた女性に、筆者がそのレシピを訪ねると、その女性は嬉しそうに「かんたんなんだよー、でも秘密。」と笑顔で答えた。郷土料理の新鮮な味を楽しみ、地域の女性達の明るい対応を受けて、筆者らは設計担当者安藤のねらい通り、地域にもてなされている事を感じた。

閉じられた農村コミュニティの象徴とも言える空き家を、地域の人々が「大地の芸術祭」の作品にすることを認め、さらには自分までも参加し作品を利用したのがこの「空家プロジェクト」である。この変化は、地域とそこに住まう人々の「大地の芸術祭」への参加が、より進化した状態になったとことを表している。

## 5. 考察

本章では、第3章でみた「大地の芸術祭」の背景となる政策と、第4章で追いかけた地域住民の参加の変化を、文化政策による地域の人的資源の形成という視点から整理する。また「大地の芸術祭」の試みがどのような意義をもっているのか、筆者の研究テーマに引きつけて考察をしたい。

### 5.1 住民参加の考察

第4章4.1では、「そのお金を何で福祉や道路に使わないのか」という言葉が示すように「大地の芸術祭」は批判と無視という結果を地域に残していることを見てきた。その「大地の芸術祭」において、4.2では“出会い”を楽し

み、他者をもてなす“ホスピタリティ”が地域に育まれていることを、いくつかの出会いのエピソードを用いて示した。ここに第1回と第2回「大地の芸術祭」との間における大きな変化が見て取れる。この変化は、飛躍とも呼べるほどの大きなものである。この飛躍の背景に何があるのかをここで論じてみたい。

この飛躍の布石になった背景が、4.1の第4パラグラフに述べた、参加作家と地域住民の協働による作品作りの事例である。「現代アートは景観破壊」<sup>20</sup>であるとか、「地域福祉になぜお金を使わないのか」といった批判を受けながらも、いくつかの作品は地域住民との交流や協働を生み出した。そして、「作品を協働で作ることもお互いが刺激し合い、地域の魅力の再発見をすることにつながる」<sup>21</sup>と北川フラムが振り返った通り、作品作りを通じて、地域住民が「大地の芸術祭」への参加を、次の段階へと進化させていったと言える。3年前、もしかしたら批判の側にいたかもしれない地域の人が、第2回「大地の芸術祭」を楽しみ、観光客をもてなすという参加の仕方をした事は、明らかに「大地の芸術祭」という事業を支える、人的資源の一つが形成されたと言えるのではないだろうか。そして、第2回「大地の芸術祭」における人的資源の形成が、第3回「大地の芸術祭」における人的資源形成のさらなる展開を導き出した。

第3章3.1から3.3でみた、第1回から第3回までの「大地の芸術祭」における地域住民の参加の変化は、2章2.2で述べた通り、人的資源を地域の特定の課題解決に向けて、住民自らが積極的に行動する状態であり、地域の人的資源の形成の過程とも言える。無関心からはじまった「大地の芸術祭」への地域住民の意識は、「大地の芸術祭」が回を重ねるごとに変化していく。第2回では、他者を受け入れるホスピタリティが形成された。第3回では作家との共同作業を通じて作品への関与が生まれた。さらに、地域の負の部分ともいえる空き家を「大地の芸術祭」に提供し、自分たちも利用し始めるという、開かれた場所とところを形成してゆく変化が見られた。この変化は、「大地の芸術祭」

<sup>19</sup> 『空家プロジェクト—生き続ける民家—現代建築かが読み解く越後妻有の民家』まつだい「農舞台」、2006年、8ページ

<sup>20</sup> 市報とおかまち『だんだん』32号、5ページ

<sup>21</sup> 市報とおかまち『だんだん』前掲号、4ページ



に、住民自らが積極的に参加したという変化である。つまり、10年という歳月をかけた「大地の芸術祭」の事業によって、地域の課題に向き合い、地域を誇りとし、地域を守り、地域を発展させていこうとする人々の意識の花が開花したと言える。

## 5.2 政策の考察

第1回と第2回「大地の芸術祭」の飛躍の背景にあるのは、第3章3.1にある「里創プラン」とそれを受けて策定された、第3章3.2の「アートネックレス事業」という施策である。「里創プラン」は、策定3年実施10年という計画によって、長期的に現場の足場を固める手法をとっている。また、「里創プラン」を受けて策定された「アートネックレス事業」は、地域のソフトを主軸においた政策として「大地の芸術祭」を位置づけた。それら、2つの政策によって、第1回の経験を教訓に変える事ができ、現場の人々がより真摯な姿勢で次の第2回「大地の芸術祭」に臨めたのではないかと筆者は推測する。長期的な政策が政策自体の有効性を高め、地域住民をも進化させたのではないだろうか。

## 5.3 「大地の芸術祭」の試みの意義

ここで、「大地の芸術祭」の試みもつ意義について、筆者の研究テーマに引きつけて示してみよう。筆者は現在、京都市大原地区において、協同的实践を通じたソーシャル・キャピタルの形成について研究を進めている。大原地区は、人口約2千人の地区で、人口も面積も十日町地域の規模には及ばない。しかし、中山間地域であることや、少子高齢化が深刻な地域問題としてあげられる点や、地域活性に向けた取り組みが活発である点など共通点も多い。特に、農業の衰退に伴ったコミュニティの崩壊という課題は、空き家の増加に悩む十日町地域の課題と同じ図式であると言えよう。さらには、現在大原地区の地域活動における筆者らの協同的实践の最も大きな課題は、第1回「大地の芸術祭」

と同じ、批判と無視という地域からの評価である。したがって、「大地の芸術祭」が批判と無視の時代を乗り越え、作家と地域住民の協働を生み出し、それによって“ホスピタリティ”が育まれたことや、開かれた場とところを形成した地域住民が現れるに至ったことは、非常に心強くまた大いに参考となる事例であった。

## 6. 課題と展望

筆者は第2回「大地の芸術祭」で出会い、お世話になった十日町市役所勤務の小林氏に、第3回に参加するに当たって連絡を取り、再び出会うことができた。小林氏にお願いをして、第2回と第3回の「大地の芸術祭」担当の十日町市役所職員の方それぞれ2名に対し、ヒアリングを行なう機会を得た。ヒアリングは、「大地の芸術祭」の第2回作品であり、インフォメーションセンターでもある、越後妻有交流館「キナレ」において約2時間行ない、筆記による記録を行なった。

筆者のヒアリングにおける最大の関心は、3年後の芸術祭開催予定についてであった。2006年は、実施期間10年という「里創プラン」に基づく「アートネックレス事業」の終了年度である。したがって、「大地の芸術祭」は2006年で終了するといううわさを聞いており、真偽を知りたいと考えていたからである。ところが、3年後の開催を問うことが、実はそのまま「大地の芸術祭」の課題を問うことになった。

### 6.1 課題

「正直、こへび隊<sup>22</sup>にはめっちゃくちゃお世話になっているんですよ。」これは、ヒアリングにに応じてくれた第2回「大地の芸術祭」担当の十日町市役所の方の言葉である。この言葉が意味しているのは、行政だけで芸術祭を続けることの困難さであった。2006年で、10年目を迎えた「里創プラン」による助成は終了することになる。これまで、県の補助金と外部からの支援金によって成り立ってきた芸術祭の資金作りが、

<sup>22</sup> 首都圏に住む学生が中心となって結成しているボランティア組織。「大地の芸術祭」を陰で支える立役者である。

今後は芸術祭の独自の努力で生み出していかなくてはならなくなるのである。芸術祭は地域住民の誇り意識を形成し、開かれた場とところを醸成したが、芸術祭の継続には、今後、芸術祭をつくりあげる主体が、行政以外にも生まれるかどうかが鍵となると言えよう。

また、芸術祭をさらに地域のものにしていくために欠かさないのが、他団体との協働関係である。実は、十日町には、彫刻を主なテーマとする芸術団体が「大地の芸術祭」以前から存在している。しかしながら、その団体と「大地の芸術祭」との関係は、いまのところほとんどないのが現状である。元々の芸術団体主催の事業にも参加し、「大地の芸術祭」にも参加している作家は、たった1人しかいない。

筆者がヒアリングをした担当者の方の言葉を借りれば、「目的が一緒で、やり方が違う人々のなかで、どれだけ一緒の部分伸ばしていけるか」が課題である。好き嫌いや理解と不理解の間の齟齬が発生するのがアートであるというならば、仕方のないことかもしれないが、ともに地域に生きる主体であるという視点からならば、協働する余地は生まれるのではないだろうかという見解を、現場の担当者は持っている。

## 6.2 展望

「大地の芸術祭」は中山間地域の里山を利用したアートプロジェクトとして全国のモデルとなっている。しかしその裏には、長期計画の「里創プラン」に裏打ちされた、「アートネックレス事業」というそこに関わる地域や人を視野に入れた理念や姿勢をもった政策があったのだ。さらに成功のためには、行政側からの事業計画から始まった「大地の芸術祭」を、地域の住民

が自主的に楽しみ参加し、創り上げて自分たちのモノにしていくという過程を必要とする。そのためにも、今後は更に主体が地域住民の側にシフトされ、地域からのニーズやシーズを活かした「大地の芸術祭」に仕上げていくことが望まれる。

また、参加した関係者地域の住民の方々や全国各地から訪れた観光者など多様な関係者らが、自分たちがどのように「大地の芸術祭」に向き合い、変化したのかを語られることを切に期待する。そのことによって、「大地の芸術祭」という事例が、全国で同じ課題を抱える様々な地域に伝播し、形を変えながらも課題解決の一つの知恵となるのではないだろうか。

## 謝辞

本稿の執筆に当たり、インタビューに応じて下さった十日町市役所勤務の小林良久氏と相場俊伸氏に心より御礼申し上げます。また、第2回に引き続き、第3回「大地の芸術祭」においても案内とインタビューのコーディネートをして下さった、十日町市役所勤務の小林充氏に心より感謝の意を表明したいと存じます。小林充氏との出会いが、本稿を書くきっかけとなりました。

美しい山々や川の作り出す風景と作品の佇まいが調和する瞬間は、里山がもたらしてくれる恩恵です。人と自然とが調和するアートのあり方を示す「大地の芸術祭」が、その方向性を保ち続け、担い手が変化しても継続できる事業モデルを創り上げ、これから先も3年に一度の素敵な出会いをもたらしてくれる事を願っております。